

(1) 鍼と邪毒

① 鍼は、邪気を引く

鍼は、邪気を引く道具。真気を呼べるし、邪熱を散らせるし、痙りを弛めることもできるが、鍼の基本は引鍼にある。

② 邪気は、毒より発し、天を衝く

邪気は、体に悪い働き。歪んだ体の発するサイン。機械の調子の悪いときに聞こえる雑音に似る。ビリビリ、ピリピリした感じを手に受ける。真気に比べ、速く瞬間的に動き、振れ幅はとても細かい。実態は、生体内雑電気か？

病が動くとき、邪気も動き、天(頭)を衝く。病が動かないとき、邪気は、地(腹)の毒の中に潜(ひそ)む。小復には瘀血、大腹には水毒が溜まり、そこから出た邪気が頭を衝く。

③ 刺法

1. 手足、陽、下に引くのが三原則

(1) 手足に引く、(2) 陽に引く、(3) 下に引く

この三つが刺法の三原則。手足、陽に引くのは、邪気を体の外に出すため、下に引くのは、頭を衝かせないため。

2. 手足に引くには、経絡を利用

手足に引くには、手足の経絡と頭や体幹部の相関を考える。肘、膝から先を探すのが基本。急性症は、手首、足首より先を探す(手足の甲、八邪、井穴)。

3. 陰経は徐刺徐抜、陽経は速刺徐抜

陰経は、ゆっくりと刺し、密(ひそ)かに邪気を誘い、来終わったら静かに抜く。この刺法を「徐刺徐抜」といい、まだ動きの遅い邪を引くのに向く。

陽経は、スッと邪に当てて引っ掛け、引きながら手技をし、途切れないようにスーッと抜く。この刺法を「速刺徐抜」といい、動きの速い邪を引くのに向く。

4. 陽は横切りに引く

陽に引くには、体の横切りラインを探す。背部愈穴が代表例。

刺法は、邪の動きの速さを見て決める。

5. 最初と最後に下に引く

始めと最後に下に引けばよい。速刺徐抜。

6. 出ているツボに引く

引くべき所、すなわち、出ているツボは、経絡上に指を滑らして止まる所を取る。

表面は、力なくベコベコ凹んで、少しベタベタ湿っていることが多い。邪毒が水毒として少しづつ漏れ出ているためだろう。

敏感な人は、手をかざせば、ピリピリビリビリしたイヤな感じを受けるだろう。

7. 刺鍼の深さ

邪気が動く深さに刺す。浅すぎても深すぎてもダメ。患者さんの体が反応したら、深さを変えずに、旋捻、横揺らし、雀啄などの手技をする。反応が良い手技を選ぶ。

腰などでは反応ある所が三層のこともある。皮膚表面で陽邪が動くこともある。どこまで動かすかは、患者さんの体の反応を見て決める。

8. 熱と寒

熱には、手速く散鍼して散らす。この刺法を「速刺速抜」という。遅いと邪を引き、かえって熱くするので注意。特に、速く置き遅く引くと、痛いだけで冷めない。ゆっくり置いてもよいから、できるだけ速く引く。

寒には、置鍼して真気を呼んで温める。ただし、古方では、押し手は絶対に離さない。鍼をゆっくり大きく動かしても温まる。補の刺法

9. 筋張り

筋張りは、チョンと当てて、弛める。筋張りを左右から挟むように押手を作り、斜刺すると当てやすい。

10. 虚&冷への灸

力なくベコベコとして冷たい所には、灸をする。特に、虚が激しい所は、灸頭鍼が向く。冷えてできたツボには、灸や灸頭鍼の方が刺鍼よりも効果が高い。腹や下腿、特に足首より先。

手平、足裏や手足の指は、痛みを感じる人が多いので、鍼をせず灸が多い。

11. 補と寫

補すときは、鍼をゆっくり大きめに動かす。

寫すときは、押手を引き気味にしながら、鍼を細かく速く動かす。

しかし、補瀉は結果である。